江戸時代より採掘された、全国的に知られた房州の地下資源

登録番号	第０８２号
名称（型式等）	房州白土（房州砂）
所在地	千葉県いすみ市、館山市等
設立（竣工）年	江戸時代後期

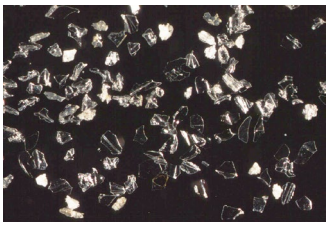
選定理由

房総半島は新第三紀～第四紀の海成層でほとんど構成されています。特に第四紀に比較的深海で形成された地層が、その後の急激な隆起によって地表に露出しています。地層は適度な固結度と柔らかさを合わせ持っていて、比較的簡単な道具で掘削が可能であるにもかかわらず、掘削した坑道が崩壊しにくい特徴を持ちます。そのため、古くから様々なかたちでこれらの地層を掘削した利用がなされてきました。

房州白土は、きめ細かいガラス質の火山灰（火山ガラス）でできています。房州白土をより細かい砂に分別したものが房州砂と呼ばれました（福島，2022)。岬町（現：いすみ市）の房州白土は上総層群黄和田層中の Kd8 凝灰岩層から産出され、館山市などの房州白土（房州砂）は千倉層群加茂層中の Ny-7 凝灰岩層から産出されます（川上・宍倉，2006)。これらの凝灰岩は火山の噴火をたどる地質学的重要性と、資源としての有用性を兼ね備えたものと言えます。

これら房州白土や房州砂は、資源として江戸時代後期から採掘され、歯磨き粉、白米搗精用磨き粉、クレンザー、ガラスや瓦の原料、セメント混和剤などとして利用されてきました（尾谷，1991、齊藤，1998)。大正 10 年頃に生産のピークを迎えますが、昭和 10 年代以降は白土を必要としない精米機の登場や、人工のクレンザーが出現したことなどを受け、徐々に採掘量を落とし、現在は生産を終えています。

左　いすみ市三門産
右　館山市谷藤原産



上総層群笠森層の
ガラス質火山灰

千葉県館山市谷藤原南の採掘抗

協力：千葉県立中央博物館、館山市立博物館

参考：

『岬町史』(岬町　1983)

髙橋直樹・大木淳一（2021）房総半島における凝灰岩層の資源利用の一形態「房州白土（房州砂)」. 日本地球惑星科学連合 2021 年大会講演要旨，M-ZZ48-01.

川上俊介・宍倉正展（2006）地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）館山地域の地質. 産総研地質調査総合センター，82p.

尾谷 茂（1991）房州白土考. 館山と文化財，(24)，6-10.

齊藤 望（1998）白土採掘坑跡. 千葉県立現代産業科学館編「千葉県の産業・交通遺跡」,54-55，千葉県教育委員会.

福島宜慶（2022）房州白土（房州砂）について.『館山と文化財』55 号，館山市文化財保護協会.